

もがみずからの体の動きにたいして事物が示す必然性をもっぱら学びとってきたきわめて限定された生活空間に関するものからとつぜん太陽と大地の関係に関わるものへと大きく飛躍するものだからである。エミールに同じ場所で日没と日の出を体験させるあのひじょうに美しい風景の描写をもういちどこでとりあげたいところだがその余裕はいまはない³⁹⁾。もっともルソーの文脈からいってもこうした大人たちの感動を呼ぶ光景もまだエミールの心を動かすにはいたらず、感情や趣味はまったく問題にならないのでひたすら明快に、単純に、そして冷静につづけていけばよいのである。「いまのばあいには、昇る太陽をかれとゆっくりとながめ、その方向にある山々とその近くにあるほかのものに注意をむけさせ、それらについてなんでも好きなように話させたあとで、夢でも見ている人のようにしばらくのあいだ沈黙していて、それからこう言ってやる」だけでよいのである。「わたしは、きのうの夕方、太陽があすこに沈んだこと、そしてけさはあすこに昇ったことを考えている。どうしてそういうことが起こるのだろう⁴⁰⁾、と。ルソーはまた子どもをこのように自然現象にじかに触れさせるとともにその理由を自分で理解するまであくまでもがまんづよく待っていてやらなければならないこと、それが知識をほんとうに子どものものとしてやるために欠くことのできないプロセスであることを強調するつぎのような文章も書いている。「あなたがたの生徒の注意を自然現象にむけさせるがいい。やがてかれは好奇心をもつようになるだろう。しかし、好奇心をはぐくむには、けっしていそいでそれをみたくしてやってはいけない。かれの能力にふさわしいいろいろの問題を出して、それを自分で解かせるがいい。なにごとも、あなたが教えたからではなく、自分で理解したからこそ知っている、というふうにしななければいけない⁴¹⁾」と。しかしそれにしてもなぜ太陽と大地なのか。それはエミールが体験可能な、そしてかれがそこで生きていかなければならない世界の全体を意味しているからである。

自分はいったいこれからどのような世界のなかで生きていかなければならないのか、この現実の世界がエミールにとっていかに広大なものであろうとそれはやがてかれの主要な関心事となってくるであろうことは確実なことだからである。また、知識の有用性という見地からはルソーはこうした大地と太陽に関する知識がとくにわれわれ人間が方位を決定するうえで重要な意味をもっていることに注目しているように見える。見える、というようなやや控えめな言い方をするわけはルソー自身この点に関しては必ずしも明確な見解の表明をおこなっているわけではなく、もっぱらうえのような知識がやがて子午線を確定してみようとする子どもの好奇心へと発展する可能性に言及したり、みずからの住まいと行き慣れた場所と太陽の位置から地図を作ろうとするにいたる可能性に触れたり、磁石を使ったおもちゃの話から偶然それが南北を指すことを子どもが発見するというエピソードをもってきたり、またパリの北郊モンモランシー近くの森で教師が生徒と一緒にわざと道に迷うという状況を設定したうえ森と町の位置関係と正午の太陽が作る影から自分たちのいる位置を生徒に考えさせるというあの有名な話をならべているだけだからである。しかしこれらはいづれも人間が世界におけるみずからの位置を確定することに結びついた話ばかりであって、ルソーがかれのいわゆる宇宙誌の有用性を主としてどのあたりに見ていたかを間接的に明らかにしているものと考えたいのである⁴²⁾。

b. 社会参加に向けて—職業教育、分業、交換

しかし自分がおかれている世界の全体像についておおよそのところがかめたならばつぎにふたたび身の回りのことに立ち戻り、あらかじめこれからなが必要となってくるかについて子どもに理解しやすい形で分かっておかなければならない。そしてここにこれまでルソーが極力避けてきた書物を介しての子ども知識の獲得ということが初めて目指されることになる。しかしそれにし

39) Cf. *ibid.*, pp. 430–431

40) *Ibid.*, p. 432

41) *Ibid.*, p. 430

42) Cf. *ibid.*, pp. 434–451